

令和4年度 奈良県立青翔中学校高等学校 学校評価総括表

【高等学校用】

年度	令和4年度(中期計画1年目)
本校の使命(スクール・ミッション)	中高一貫6年間を通した理数教育の推進により、地域に貢献するとともに、科学技術創造立国たる日本の未来を牽引するサイエンスノベーターを創出します。
年度重点目標	科学技術人材育成にむけた探究的な学びと授業改善の推進

1 スクール・ポリシーの内容

教育方針 (スクール・ポリシー)	入学者の受け入れに関する方針 (アドミッション・ポリシー)	自然科学の分野で社会に貢献できる人材の育成を目指し、以下のような生徒を求めます。 1 科学的な現象を探究しようとする意欲をもち、物事を論理的に粘り強く考えるための土台となる数学が好きな生徒 2 将来、科学研究活動を通して社会に役立ちたいと願い、実験・観察や理科に興味・関心をもち、自ら進んで課題の発見や解決に努めようとする生徒 3 基本的なコミュニケーション力を身に付け、仲間と協働できる生徒
	教育課程の編成及び実施に関する方針 (カリキュラム・ポリシー)	中高一貫6年間を通した理数教育を、以下のように推進します。 1 全校体制での探究的な学びの充実 2 STEAM教育の視点に立った教科等横断的取組 3 SDGsを活用した地域課題を解決するための自治体・企業等との連携 4 中高一貫理数教育の特色を生かした体系的カリキュラムの編成 5 高次の研究を実現させるための国内外の大学等との継続的な連携 6 異学年集団の学びによる科学的リテラシーの習得
	育成を目指す資質・能力に関する方針 (グラデュエーション・ポリシー)	サイエンスノベーターとして必要となる、以下の資質・能力の育成を目指します。 1 課題発見・解決・設定に必要な創造的思考力 2 科学的根拠に基づいた総合的判断力 3 多様な考え方を尊重しチームで協働するコミュニケーション能力

2 奈良県教育振興基本計画(「奈良の学び推進プラン」)が示す各テーマごとの学校教育目標

テーマ	学校の教育活動に関する目標(A)	計画期間における具体的目標(B)	令和4年度末の目標値等(C)	令和4年度末の状況(D)	自己評価(E)	学校関係者評価(F)	改善方策
1. 心と身体を子どもの成長に合わせてはくむ	基礎的な体力の向上	各自の体力の向上 スポーツテストのA・B判定が4 0 %以上	各自の体力の向上 スポーツテストのA・B判定が4 0 %以上	スポーツテストのA・B判定は、31%であった。	C	C	日々の体育の授業で、運動に興味を持たせる指導法を検討する。
	望ましい生活習慣の確立	朝食摂取率が9 0 %以上 睡眠時間6時間以上が8 0 %以上	朝食摂取率が8 5 %以上 睡眠時間6時間以上が7 5 %以上	「生活アンケート」の結果より、朝食摂取率は、88%、睡眠時間6時間以上は、60%であった。	B	B	「保健だより」を発行し啓発を推進する。 決まった時間に起きたり寝たりできるように、継続的な指導を展開する。
	自身の健康管理	歯科検診などの治療勧告後の受診率が5 0 %以上	歯科検診などの治療勧告後の受診率が5 0 %以上	受診率は、57%である。	A	A	保護者への啓発をすすめる。数値目標の上方修正を検討する。
2. 学ぶ力、考える力、探究する力をはくむ	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」という質問について、肯定的な回答が7 0 %以上 生徒の意識調査の「自ら取り組み姿勢(自主性、やる気、挑戦心)」が身に付いたという回答が9 0 %以上	授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」という質問について、肯定的な回答が7 0 %以上 生徒の意識調査の「自ら取り組み姿勢(自主性、やる気、挑戦心)」が身に付いたという回答が8 5 %以上	授業アンケートの「授業に学ぶ楽しさを感じますか」という質問について、肯定的な回答は80%であった。 SSH意識調査より「自ら取り組み姿勢(自主性、やる気、挑戦心)」が身に付いたという回答は、72%であった。 「探究的な学びに関する授業改善シンポジウム」を実施した。(11月)	B	B	この結果を、教員の自己評価の材料とし、さらなる授業改善を推進する。
	学習意欲の向上	ジェネリックスキルテストにおける学習意欲に関する項目の得点が1 0 % (令和4年度を基準とする) 向上	ジェネリックスキルテストにおける学習意欲に関する項目の得点が1 0 % (令和3年度を基準とする) 向上	ジェネリックスキルテストにおける学習意欲に関する項目の得点が5%(令和3年度を基準とする) 向上した。	B	B	授業改善をすすめる、生徒の学習意欲を高める。 本校独自のジェネリックスキルテストを開発中で、質問項目などのさらなる検討を進める。
	探究的な学びの推進による、主体性、独創性の養成	生徒の自主性、独創性が身に付いたという回答が、ともに8 0 %以上	生徒の自主性、独創性が身に付いたという回答が、ともに7 5 %以上	SSH意識調査より、自主性、独創性が身に付いたという回答は、70%であった。	B	B	生徒のメンタル部分の指導に重点をおき、指導法を検討する。
	ICTを活用した授業改善	教員の情報活用指導力の取得が8 0 %以上	教員の情報活用指導力の取得が7 5 %以上	ICTの活用率は、69%である。中高での取組は、他校の参考になっている。	B	B	授業公開などによる、校内での研修を進める。
3. 働く意欲と働く力をはくむ	インターンシップの充実と産業界との連携	中学校の職場体験および高校のインターンシップ(教育研究所主催等)への参加で「よかった」という回答が8 0 %以上、職場見学や企業の研究開発等に関わる講演会の実施で「よかった」という回答が8 0 %以上	中学校の職場体験および高校のインターンシップ(教育研究所主催等)への参加で「よかった」という回答が7 5 %以上、職場見学や企業の研究開発等に関わる講演会の実施で「よかった」という回答が7 5 %以上	中学校の職場見学を実施し、「よかった」という回答が100%であった。 高校のインターンシップ参加者は3名で、3人とも有意義でよかったとふりかえっている。 10月に実施した進路講演会では、98%の生徒がよかったと回答している。 2月に実施した進路講演会では、94%の生徒がよかったと回答している。	A	A	アカデミックインターンシップも取り入れ、地域の企業と連携を密にし、キャリア教育を充実・発展させる。
	キャリア教育の推進	社会への参画を見据えた、大学や企業での研修・共同研究の実施 筆記試験だけにたよらない総合型・学校推薦型選抜で進学する生徒の割合を2 0 %以上	社会への参画を見据えた、大学や企業での研修・共同研究の実施 筆記試験だけにたよらない総合型・学校推薦型選抜で進学する生徒の割合を2 0 %以上	学校設定科目の「探究科学」「統合科学」において、企業や自治体との共同研究をする生徒は、昨年度より増加している。 総合型・学校推薦型選抜による進学予定生徒は、19%である。 「統合科学」について、御所市のアザレアホールで研究発表会を開催した。(12月) 「探究科学」について、大和高田市のさざんかホールで研究発表会を開催した。(2月)	A	A	学校設定科目の「探究科学」「統合科学」の取組を、進路指導につなげるための取組を充実させる。数値目標の上方修正を検討する。
	ジェネリックスキルの伸長	リテラシー(情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力)とコンピテンシー(対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力)の上昇した生徒7 0 %以上	リテラシー(情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力)とコンピテンシー(対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力)の上昇した生徒7 0 %以上	ジェネリックスキルテストにおいて、リテラシー(情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力)とコンピテンシー(対人基礎力、対自己基礎力、対課題基礎力)の上昇した生徒は、55%であった。	B	B	独自のジェネリックスキルテストの結果を参考として、生徒の変容を見取りながら、本校の取組を評価し、改善を進めることで、学校の発展を目指す。
4. 地域と協働して活躍する人を育てる	地域の課題を発見し、解決する力の養成	生徒の課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答がともに8 0 %以上	生徒の課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答がともに7 5 %以上	SSH意識調査より、課題発見力、課題解決力が身に付いたという回答は、75%であった。	A	A	探究的な学びを全科目で推進するなかで、課題発見・解決・設定に必要な創造的思考力を育てる。
	海外姉妹校等との協力による、国際性の養成	生徒の国際性が身に付いたという回答が8 0 %以上	生徒の国際性が身に付いたという回答が7 5 %以上	SSH意識調査より、国際性が身に付いたという回答は、50%であった。	C	C	コロナ禍においての国際性を育む方法を検討する。
5. 地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる	発達段階に応じた人権教育の推進	中高6年間を通じ、発達段階に応じた体系的な指導計画やプログラムに基づくLHRや行事を実施	中高6年間を通じ、発達段階に応じた体系的な指導計画やプログラムに基づくLHRや行事を実施	LHR、人権講演会を計画的に実施した。	A	A	さらに、具体的な数値目標の設定や、生徒の感想やメッセージなどの統計的な分析を行う。
	学校いじめ防止方針に基づく取組の推進	「こころとじいめのアンケート」の結果に基づいて個別面談が必要な生徒との面談(年間2回以上)の実施 職員間の情報共有の推進	「こころとじいめのアンケート」の結果に基づいて個別面談が必要な生徒との面談(年間2回以上)の実施 職員間の情報共有の推進	必要生徒に対しては、SC(スクールカウンセラー)と連携し、定期的な面談を実施している。 職員会議等の機会を使って情報共有するとともに、日常的に情報交換をすすめている。	A	A	日常的な情報交換の機会を充実させ、個別最適な指導を目指す。
	個別の教育支援計画や個別の指導計画の活用	対象となる生徒の状況の全職員による共有と、対象生徒の保護者との個別面談(年間2回以上)の実施	対象となる生徒の状況の全職員による共有と、対象生徒の保護者との個別面談(年間2回以上)の実施	対象生徒の保護者と、1学期・2学期3者面談時に、個別に面談を実施した。	A	A	支援が必要な生徒だけでなく、全体として取り組む体制を構築し、生徒一人一人の困り感に寄り添いながら支援や対応をしていく。

3 評価結果の分析、今後の改善方策等

授業には真面目に取り組む姿勢があるものの、アンケートからは、目標達成に向けて、意欲の向上を進めることが課題であることがわかる。体力の向上、レジリエンスの育成を重点項目にすえ、独自のジェネリックスキルテストの結果を参考として、生徒の変容を見取りながら取組を評価し、改善を進めることで本校の教育活動の充実・発展を目指す。
令和4年度のアンケートによると、本校に入学してよかったと回答した割合は、生徒80%、保護者91%であった。